

CLF

REPORT

Center for Learning support and Faculty development report



ラーニング・commonsでの活動風景

CONTENTS

学習支援・教育開発センター所長 挨拶	2	各学部・研究科・センターFD活動報告	7
2013年度の設置部会	3	2012年度「キャンパスライフに関するアンケート調査」集計結果	8
FD支援部会		各種活動に費やす時間	
大学院教育検討部会		クラブ・サークル活動の状況	
学習支援検討部会		学外FD企画参加記	10
ラーニング・commons運営状況	4	FD関連企画のご案内	11
アカデミック・インストラクター紹介	5	新着図書情報	11
開催報告	6	2013年度「大学入学準備講座」のご案内	12
2013年度新任教員研修会・TA研修会		コラム 大学教育の今	12
学習支援・教育開発センターFD講演会			



主体的な学びにどう向き合い、 学習成果につなげていくかが求められる

学習支援・教育開発センター所長 山田 礼子

今年度から学習支援・教育開発センター所長を拝命いたしました山田礼子でございます。

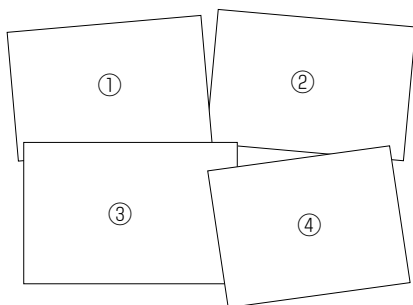
2012年に公表された中央教育審議会の答申『新たな未来を築くための学士課程教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』では、グローバル化の流れのなかで、予測困難な時代に立ち向かい、時代を生き抜く力を学生が確実に身に付けるための大学教育改革が、学生の人生と日本の未来を確固たるものにするための根幹であり、そのために、学士課程教育の質的転換をすすめることが不可欠であるとされています。また、生涯学び続け、主体的に考える力を意味する「主体的な学び」は、十分な学修時間を通じて醸成されると認識されています。

本学でも、学生たちの「主体的な学び」を促進する環境を充実させるために、本年度から「ラーニング・コモンズ」が稼働しています。充実した学びの環境を学生そして教職員がともに活用しながら、主体的な学修環境を実質化するために、学習支援・教育開発センターも支援をおこなっていきたく願っています。

さて、今年度から発足した第7期中央教育審議会では、認証評価の方向性として、学習成果重視型への移行と内部質保証の充実が示されました。認証評価が今までのようなインプット重視からアウトプット重視へと転換し、そのために各大学での内部質保証の充実が求められるようになります。内部質保証の充実のためには、学生がいかにか主体的に学び、同時に教員が学生の主体的な学びにどう向き合い、学習成果につなげていくかが大学全体として求められるようになってきます。そのためには、教育成果をエビデンスベースで把握するIR(インスティテューショナルリサーチ)機能の充実が求められるようになります。

本学でもぜひ、こうした方向性を大学全体として確認しながら、すすめていこうにしたいと考えております。どうかご支援、ご協力のほどお願いいたします。

表紙の写真について



◎ラーニング・コモンズでの活動風景

- ①インフォダイナーでの学習風景。短焦点のプロジェクターとホワイトボードを活用し、活発なグループワークが行われていました。
- ②プレゼンテーションコートで開催したワークショップの様子。参加者3～4人ごとにグループを作り、協同学習に関する知識を深めました。
- ③グローバルビレッジでの交流。グローバルビレッジでは、多文化交流の接点となる場として、様々な仕組みを用意しています。今後、ワールドカフェ等のイベントも実施する予定です。
- ④留学生への禅文化体験の講義の様子。通常はグループワークエリアに置いてある畳型の台座をプレゼンテーションコートに移動し、留学生向けの茶道の実習が行われました。

FD支援部会

教育内容・授業方法の改善を推進するとともに、教育効果に関わる全学的な企画の検討を行うことを目的として設置されています。

■ 2013年度事業計画

- ① 学生による授業評価アンケート調査の実施と調査方法の見直し
- ② 「大学入学準備講座」の企画
- ③ FDに関する意識高揚活動の実施
- ④ FD講演会・ワークショップの開催
- ⑤ 「キャンパスライフに関するアンケート調査」の実施及び調査結果の分析
- ⑥ 「キャンパスライフに関するアンケート調査」調査結果の利用促進

部会長からのご挨拶



山田 礼子

今年度からFD支援部会長をつとめさせていただく山田礼子です。

今年度からは昨年度まで設置されていた教育効果向上部会がFD支援部会の一部として統合されました。その背景としては、本部会を所管する組織が従来の教育開発センターから学習支援・教育開発センターへと名称変更したことにも関係しています。そこには、TeachingとLearningは切り離すことのできないもの、教員と学生の相互作用の結果が「学びの成果」であるという概念が根本にあります。

現在、学生の主体的な学びを成果につなげるという動きが日本全国で進みつつあります。主体的な学生の学修へとつなげるためにも、教員の教育への関わりと学生への学習支援を一体的に考え、支援する方策を検討することが本部会の目的であります。学生の主体的な学びを支援する環境としての「ラーニング・コモンズ」が開館し、素晴らしい環境が整えられました。こうした環境を効果的に使い、今後は成果へとつなげていくことが求められます。そのために設置された「学習支援検討部会」や大学院教育を検討する「大学院教育検討部会」とも連携しながら、本学のTeachingとLearningの向上のために頑張りたいと思います。よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

大学院教育検討部会

本学の大学院教育充実のために、教学支援体制ならびに学生支援体制の強化の諸方策を検討することを目的として設置されています。

■ 2013年度事業計画

- ① TA研修制度の検討
- ② 大学院教育充実のための情報提供と意見交換
- ③ 大学院生のキャリア形成支援方策の検討

部会長からのご挨拶



武蔵 勝宏

文部科学省は昨年6月に大学改革実行プランを公表しました。同プランでは、大学教育の質的転換やグローバル化に対応した人材育成、研究力の強化、地域再生の核といった各大学の機能を自ら定義し、ビジョンを策定することが求められるようになっていきます。

大学院教育検討部会では、これまでTA制度の充実や学位授与プロセス・博士論文審査ポイントの明確化などに全学的に取り組んできましたが、昨年度からは、修了後の進路に焦点をあて、大学院生のキャリア形成支援の方策に集中的に取り組むこととしています。本学ではポスドク制度の活用等によって博士号取得者の教育・研究職への就職に先鞭をつけてきたと言えますが、博士号取得後ノンリサーチ(非研究職)として就職希望する院生や、博士前期課程修了者のキャリア支援については、各研究科の取り組みに依存しており、FDの観点からの組織的な取り組みはこれからです。本学が研究大学として、地域社会やグローバルな環境で活躍できる大学院修了者を社会に輩出するためには、そのキャリア形成を見据えた全学的な取り組みが欠かせません。

今年度は、キャリアセンターや高等研究教育課とも連携しながら、大学院教育のFD充実に引き続き取り組んでいきたいと思っています。今後とも皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

学習支援検討部会

本学における学習支援活動や学習支援環境(ラーニング・commons等)の運営方法を検討することを目的として設置されています。

■ 2013年度事業計画

- ①ラーニング・commonsの運営に関わる検討
- ②学習支援充実のための情報提供と意見交換



部長からのご挨拶



百合野 正博

今年4月、今出川校地良心館にラーニング・commonsが開設されました。国内最大級の授業外学習施設として、政府や高等教育機関からの熱い注目を浴び、国内は言うに及ばず海外からも見学者が絶えません。平日約3,500名の利用者がさまざまな学習活動を活発に展開しています。

しかし、施設を作ればそれで十分、というわけではありません。この恵まれた学習環境を活かし、学生諸君が大学での学習の面白さを実感するとともに充実した学習体験を得るにはどのような支援プログラムが必要になるのか。さらに今後予定される新たな学習環境を効果的に運営するにはどうすればよいのか。こういった課題に常に向き合っていかなければなりません。

そのために、今年度より学習支援検討部会が設置されました。部会では、具体的で前向きな提案や意見が委員から出され、多方面にわたる熱心な議論が重ねられています。諸課題への対応が着実に進み、質の高い「学びのコミュニティ」が同志社大学に早期に形成されるものと確信できる緊張感がみなぎっています。

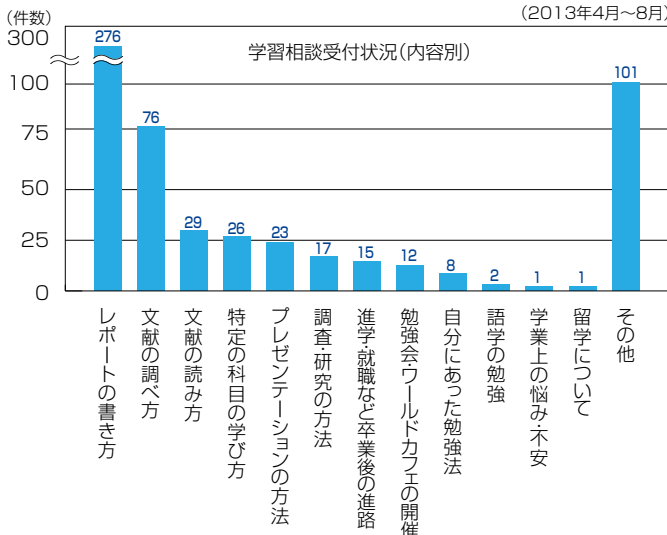
本学の学生諸君がひとりの人間として大きく成長するために、各キャンパスそれぞれの特徴に応じた学習支援のあり方、学習環境の整備を検討してまいりますので、皆様のご協力とご支援を心よりお願い申し上げます。

ラーニング・commons運営状況

2013年4月に開設したラーニング・commonsの運営状況についてご紹介します。



■ 学習相談



ラーニング・commons3階のアカデミックサポートエリアでは、アカデミック・インストラクターが学生の学習相談に乗っています。

開設した4月から8月末までの間に、延べ406名の学生から約600件の相談を受け、特にレポートの書き方に関する質問が多く寄せられています。

■ 協同学習ワークショップ



7月18日18時30分より、講師に安永悟氏(日本協同教育学会理事・初代会長/久留米大学教授)をお招きし、ラーニング・commons2階のプレゼンテーションコートにおいて、協同学習に関するワークショップ「先輩をサポートしたいあなたに～知らないうちに、学びを最大化できる協同学習とピアサポートへの誘い」を開催しました。

約30名の学生・教職員が参加し、協同学習の考え方・進め方と活動性を高めるグループづくりを理解することを目的として、様々なグループワークを交えながら、約2時間のワークショップを行いました。秋学期にも同様のワークショップの開催を予定しています。

ラーニング・commonsの最新情報は以下のURLよりご参照ください。

ラーニング・commonsのページ <http://www.doshisha.ac.jp/research/lc/lc.html>

アカデミック・インストラクター紹介

良心館ラーニング・commonsには、学生の学習相談や各種学習イベントの企画・実施等を行うアカデミック・インストラクターが常駐しています。
2013年4月に着任した3名のアカデミック・インストラクターをご紹介します。

清水 亮 (しみず りょう)

アメリカの大学院への留学、18年の大学における教育経験をもとに、学生の皆さんが、わかる、できる、楽しいからもっと学びたいと、知らず知らず
に学びをステップ・アップできるようにサポートします。ひとりひとりのニーズに合わせて、アカデミックサポートエリアで、みなさんの主体的な学びを推進していきます。学びに「LEAN IN(一歩踏み出す)」お手伝いができれば、うれしい限りです。

得意分野

国際関係論 / 多文化コミュニケーション / 高等教育論



岡部 晋典 (おかべ ゆきのり)

専門は図書館情報学です。これまでは主に本の分類や情報探索の方法など、図書館員になるための知識を教壇で教えていました。このノウハウが本学のラーニング・commonsで活かせると考えています。たとえば現在、Google検索だけで資料探索を済ませてしまう学生が多くいますが、それだけではもちろんレポートや論文にはなりません。アカデミックスキルの基礎を学生に習得してもらえよう頑張ります。

得意分野

情報探索 / コンピュータ関係 / 図書館情報学を背景とした学際分野



鈴木 夕佳 (すずき ゆうか)

良心館ラーニング・commonsには、毎日平均3,500名の学生が訪れ、勉強しています。その中で、我々の常駐するアカデミックサポートエリアに自身の課題の「正解」を求めてくる学生も少なくありません。そのような学生には、「あなたの意見は？」と問いかけることから指導が始まります。ここでは方法論をアドバイスするのはもちろんですが、学生自身が自分なりの答えを導き出せるような、能動的学習の手助けをしていきたいと思えます。

得意分野

レポート作成法 / 思考ツール / その他、基礎的な学習スキル



2013年度新任教員研修会・TA研修会

今年度の新任教員研修会を4月2日に、TA研修会を4月4日・5日・8日に開催しました。各研修会の資料・動画を下記のページで公開していますので、ぜひご覧ください。

◎新任教員研修会の様子

新任教員研修会 >>> 「教職員のページ」(本学教職員のみ閲覧可能)



今年度は62名の参加がありました。

◎TA研修会の様子

TA研修会 >>> <http://clf.doshisha.ac.jp/ta/ta.html>



3日間の開催で合計559名の参加がありました。

学習支援・教育開発センターFD講演会

7月30日18時30分より、国際化推進室との共催でFD講演会を開催しました。

テーマ

教育の組織化、教育課程の体系化・可視化による質保証 —コース・ナンバリングの意味と意義—

内容

川嶋 太津夫 氏 (神戸大学 大学教育推進機構教授 / 中央教育審議会 大学分科会大学教育部会委員)

会場

今出川キャンパス 寧静館会議室
京田辺キャンパス ラウンジ棟207会議室(※テレビ会議システムによる配信)

授業科目に適切な番号を付し分類することで、学修の段階や順序等を表し、教育課程の体系性を明示する「ナンバリング制度」の導入は、本学において取り組むべき喫緊の課題です。

そこで今回の講演会では、中央教育審議会委員の川嶋太津夫先生にお越しいただき、ナンバリング制度と学士課程教育の質保証との関連、アメリカおよび日本での導入事例、留意すべき課題等についてご講演いただきました。当日は学内外から100名を超える参加があり、質疑応答では、国際通用性のあるツールとして活用する際の留意点や分類の困難さ等について多くの質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。

講演会に参加できなかった方には、学習支援・教育開発センター事務室に当日の配付資料を用意していますので、適宜閲覧してください。また、学内教職員の方は「教職員のページ」からも動画・資料をご覧ください。



参加者の声

- アメリカ、日本の大学の具体例をあげながら説明していただき、わかりやすかった。ナンバリングを導入した後の課題にどう取り組むかが重要である。
- ナンバリングの目的・概要についてある程度理解できた。作業に入る第一歩として大変参考になった。
- ナンバリングの目的・教育課程の体系化をする必要性が具体的に理解でき、非常に有意義でした。
- ナンバリングの効果、意義がよくわかった。同時に、これを活かすためには教学のマネジメント、教員の意識改革がポイントだと感じた。

各学部・研究科・センターFD活動報告

このコーナーでは、各学部・研究科・センターにおけるFD活動の報告を順次掲載していきます。

◎政策学部 山谷 清志

政策学部は従来の少人数教育と教員の自己評価の原則をふまえながらも、いくつか大きな改革を行ってきた。具体的にはFD活動の強化にあわせた具体的方策の導入(シラバスにおける成績評価基準等の明示・複数回試験等)、大学院総合政策科学研究科との連携、同志社大学全体で強化してきた教育理念のひとつ国際化にあわせたカリキュラム目標の見直しである。国際化専修コースの設立(2011年)、海外活動を伴う正課科目の創設とその履修支援(2013

年)、同志社大学外国協定大学派遣留学支援であり、これらは「国際化」のポリシーを実現する政策学部の試みである。この試みや見直しは従来FD活動の一環として行ってきたアンケートにおいて得られた学生の希望、父母懇談会での意見を参考に進めてきたものであり、今後もFD活動を通じて得られた知見をフィードバックしてさまざまな施策を検討していくつもりである。

◎文化情報学部 田口 哲也

文化情報学部では、先日「アカデミック・ハラスメント防止研修会」を開催した。講師は、奈良県立医科大学女性研究者支援センターの御輿(おごし)久美子氏に來校いただき、多くの学部教員が参加のうえ、ハラスメント防止について理解を深めた。まず、アカデミック・ハラスメントの定義や、マスコミ報道における他大学での事例が紹介され、続いて注意点や防止策についての質疑応答や意見交換がなされた。

昨今、初・中等教育における様々な学習環境で育った

入学者に対して、従来のような画一的な大学の授業内容では、十分な教育効果を発揮できなくなったが、卒業研究などの直接的・対面的な指導においても同様のことが言えよう。高等教育において、十分に彼らの潜在能力を引出し、個々の性格に応じた適切な対応を実現させるため、この研修会に参加した教員は、認識を新たにした。今後も、様々なハラスメント防止について理解を深めていくため、このような研修会の開催を継続して検討する予定である。

◎理工学部 馬場 吉弘

科学技術は国や言語の垣根を越えて発展している。理工学部・理工学研究科は、教育面においては国際舞台でも活躍できる技術者や研究者を育成することを、研究面においては世界的な研究開発成果を生み出すことを目指している。これまでに、ヨーロッパの複数の科学技術分野のエリート校と学部(研究科)間協定を結び、学生の交換留学を行ってきた。ダブルディグリー制度を利用して、フランスのグランゼコールと本学の両方の学位(修士)を取得する学生もいる。

また、韓国の全南大学校工学部とはインターセミナーをほぼ毎年開催している。このセミナーは、教員の交流を主目的の一つとしており、FD活動としても重要である。このような実績や経験に基づき、2010年には、生命医科学研究科と協力して「国際科学技術コース」を設置し、さらに2013年度には、グローバル・スタディーズ研究科および他連携研究科と協同で前期・後期課程一貫の教育プログラム「グローバル・リソース・マネジメント」を開始するに至っている。

「キャンパスライフに関するアンケート調査」 集計結果

2012年度



学習支援・教育開発センターでは、2004年度から「キャンパスライフに関するアンケート調査」を実施しています。この調査は、学生の学習状況や意識をとらえることによって、本学の教育改善につなげることを目的としています。毎年3月下旬の成績交付時に、1年次および3年次の終了時点の学生を対象に調査を行っています。2012年度は、1年次生の調査で3862件(回収率:63.5%)、3年次生の調査で3398件(同56.1%)の回答が得られました。2012年度調査では、生活時間をとらえる項目として、これまでの「授業外学習時間」、「アルバイト従事時間」のほかに、「クラブ・サークル活動時間」、「(授業とは関係のない)読書時間」を追加しました。さらに、「クラブ・サークルの加入状況」などの調査項目を新たに設置しました。今回のレポートでは、こうした新規項目について、1年次調査の結果を紹介します。

1. 各種活動に費やす時間

はじめに、授業外学習、アルバイト、クラブ・サークル、読書といった各種活動に対して、本学の学生がどの程度の時間を費やしているのかを確認していきます。図1は1週間あたりの平均活動時間を項目別に算出した結果です。学生が最も多くの時間を割いているのはアルバイトの9.24時間で、これにクラブ・サークル活動の8.23時間が続いています。他方、近年、学習成果の指標のひとつとして注目されている授業外学習時間については4.67時間にとどまっています。

次に、平均だけでは学生のライフスタイルの実態をつかむことは難しいので、各種活動に費やす時間の分布についてもみていきましょう。図2は回答を5時間ごとに区分して集計したものです。平均活動時間が最も長かったのはアルバイトですが、図2から、「0時間」と回答した学生の割合が28.6%と他の活動と比較して多いことが判明しました。そうした一方、1週間にアルバイトを「16時間以上」行っている学生も2割弱(19.7%)います。アルバイトに関しては、積極的に取り組む学生と消極的な学生に二極化しているようです。

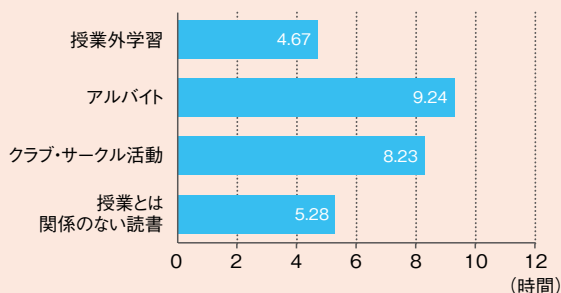


図1：1週間あたりの平均活動時間(1年次)

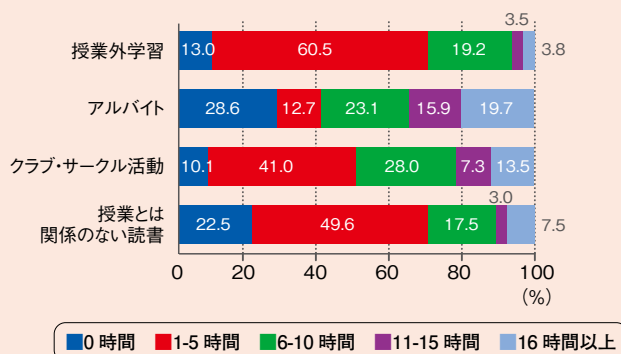


図2：1週間あたりの各種活動に費やす時間(1年次)

さらに、図3から図6は学問領域別に各種活動時間の平均を算出したものです。これらの図を比較してみると、学問領域によって、学生が力点を置く活動は異なっていることがわかります。例えば、人文学系ではアルバイトやクラブ・サークル活動に費やす時間が少ない一方、授業外学習と読書活動に時間を割く学生が多いことが示されています(図3参照)。自然科学系は、人文学系と回答傾向が類似していますが、人文学系とは対照的に読書時間が本学全体を下回っている点が特徴的です(図5参照)。

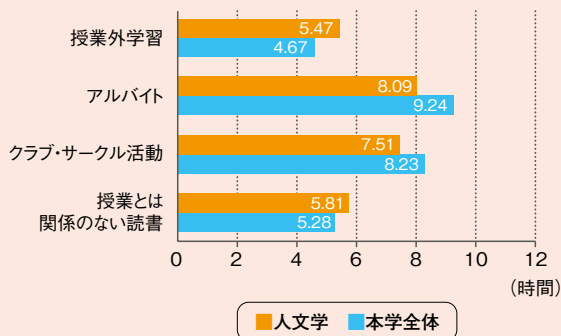


図3：人文学系学生の平均活動時間(1年次)

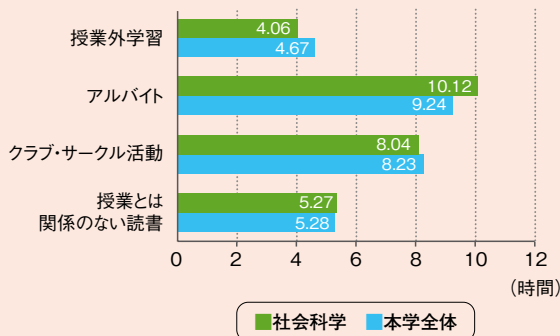


図4：社会科学系学生の平均活動時間(1年次)

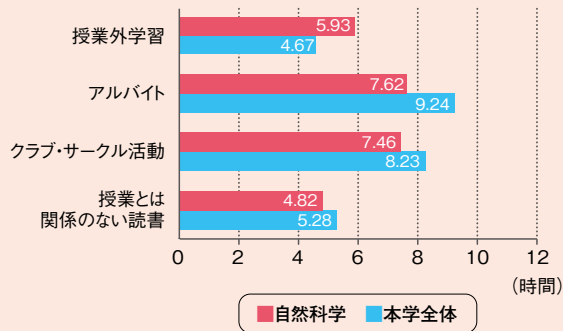


図 5：自然科学系学生の平均活動時間(1年次)

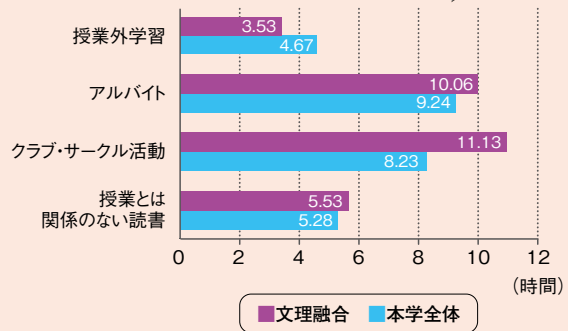


図 6：文理融合系学生の平均活動時間(1年次)

* 人文系=神学部+文学部+グローバル・コミュニケーション学部 社会科学系=社会学部+法学部+経済学部+商学部+政策学部+心理学部
 自然科学系=理工学部+生命医科学部 文理融合系=文化情報学部+スポーツ健康科学部

2. クラブ・サークル活動の状況

続いて、クラブ・サークル活動の内実について確認していきます。図7は、1年次生のクラブ・サークルの加入状況をまとめたものです。図7によると、クラブ・サークル加入率は7割(72.1%)を超え、クラブ・サークルに「加入したことはない」学生は2割(15.3%)を下回っています。そうした一方、調査が実施された1年次終了時点で、既にクラブ・サークルを脱退している学生も1割ほど(12.6%)いることが明らかとなりました。

本調査では、現在、加入している(過去に加入していた)クラブ・サークルの種別についても回答を求めています。回答結果をまとめた図8をみると、最も多くの学生が加入している団体カテゴリー(過去に加入していた団体を含む)は、「公認団体:文化系」で全体の4割弱(39.3%)を占めています。これに、「公認団体:スポーツブロック(22.3%)」、「公認団体以外の学内団体(18.3%)」が続きます。一方、「公認団体:体育会」に加入している学生の割合は15.0%でした。

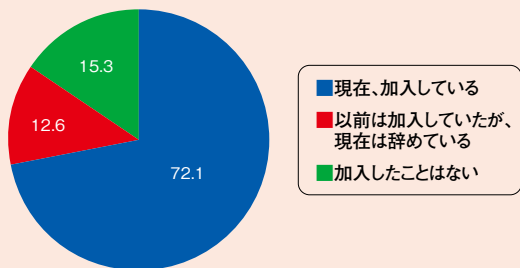


図 7：クラブ・サークルの加入状況(1年次)

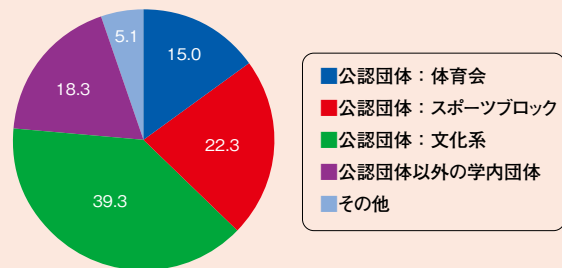


図 8：現在、加入している(過去に加入していた)クラブ・サークル(1年次)

最後に、団体種別ごとに1週間あたりの平均活動時間を比較してみましょう。結果をまとめた図9によると、「公認団体:スポーツブロック」、「公認団体:文化系」、「公認団体以外の学内団体」の平均活動時間が5時間後半から7時間前半の範囲に収まっているのに対して、「公認団体:体育会」の平均活動時間は17.03時間と他を圧倒しています。図10は活動時間の分布を示したのですが、これによると、「公認団体:体育会」に所属する学生のうち、週あたりの活動時間が5時間以下の学生は2割未満(19.8%)にとどまり、活動時間が「16時間以上」である学生は半数近く(46.4%)を占めています。どうやら「公認団体:体育会」に所属する学生の活動時間(練習時間)の長さが本学全体の平均活動時間を押し上げているようです。

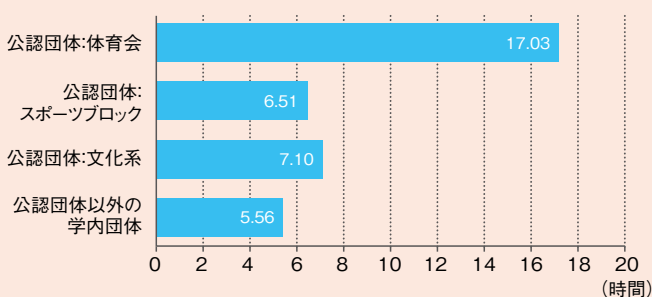


図 9：団体種別ごとのクラブ・サークル活動の平均時間(1年次)

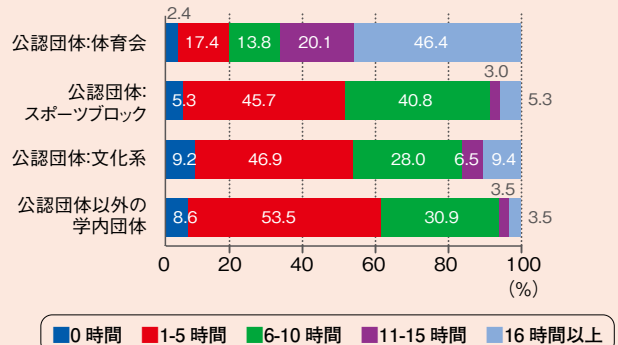


図 10：団体種別ごとのクラブ・サークル活動に費やす時間(1年次)

* 図9および図10はクラブ・サークルに「現在、加入している」と回答した学生のみを分析の対象としている。また、「その他」の団体に加入している学生は少数であるため、分析の対象から除外した。

学外FD企画参加記

学習支援・教育開発センターでは、ホームページやメーリングリストを通じて、FDに関連したセミナーやシンポジウムを案内しています。実際に参加された先生にセミナーの様子や感想をお伺いしていますので、今後の参加の参考にしてください。

※今後開催予定のFD関連企画はP.11でも紹介しています。

大学教育学会第35回大会プレセッション

テーマ **自然科学総合実験授業見学と説明**

日程 **2013年5月31日(金)**

主催：東北大学

理工学部

坂東 敏博 准教授

理工学部の教員として私も学生実験を担当しながら、しばしばその根本的なあり方を考える必要性を感じていたが、今回、東北大学で学生実験へのユニークな取り組みを見せていただける機会があり参加させていただいた。

東北大学の自然科学総合実験は、理系1年次の学生のほぼ全員を対象に、「自然科学の学び方」や「多角的なものの見方」を育むことをめざして行われている必修の実験科目である。学部や学科ごとに行われる専門研究に直結する実験とは異なり、「地球・環境」、「エネルギー」、「生命」、「物質開発」、「科学と文化」の5分野のテーマについて、試行錯誤を繰り返しながら、自然科学全般の共通基盤となる考え方や態度を身につけてもらうと設定されている。実験のため新たに建てられた口の字型の建物には、各階口の字の1辺に1分野の各実験が行われる部屋や区画がまとめて配置され、学生は、この口の字の建物の中を1セメスターかけて巡りながら、自然科学の課題に対する問

題解決の方法を身につけていく仕掛けになっている。実験テーマには、現在のエネルギー問題解決につながる「太陽電池の仕組み」に関するものもあれば、「弦の振動と音楽」のように自然科学と文化の関係を考えるものもあり、この科目が目指すものの懐の深さを感じさせるテーマ設定になっていた。実験を担当する教員は理系学部全体から参加し、受講学生の所属学部学科に関わらずその担当テーマを指導している。教える側も学部側も学部をまたぐ設定だけに、実験指導やレポート管理のシステム作りにも、分かり易さを念頭にきめ細かい工夫がされており、また、担当教員のコンセンサス作りにも苦労されている様子が伺えた。

目の前の知識やハウツーを身につける以前に、基本的なものの見方や考える態度を大学全体で醸成していこうという考え方で、工夫を重ねながら学部横断的にそれを実現しつつある姿には輝きを感じさせるものがあった。

2013年度教学実践フォーラム

テーマ **留学生と日本人学生の『学びあい』**

日程 **2013年7月24日(水)**

主催：立命館大学

政策学部

岡田 彩 助教

本年度より、政策学部にて「アカデミック・スキル2(伝達)国際社会に通じるコミュニケーション・スキルを身につけよう」という授業を担当している。各自関心のある政策課題について、英語のポリシーメモにまとめ、発表することを目的とした授業である。この授業において、京都アメリカ大学コンソーシアム(KCJS)とコラボレーションする機会を得、交流会やプロジェクトのサポート、ピア・エディティングを通じて、政策学部生とKCJSの学生、相互の学びの創出に努めている。普段の学生生活の中で、留学生と接する機会が限られていると感じている政策学部生にとって、アメリカ人学生との交流は、刺激的な体験となっているようである。

このような背景から参加した上記フォーラムでは、正課授業内での交流可能性をテーマに、立命館大学で実施されている4つの実践例が紹介された。いずれも、異文化間交流および異文化間コミュニケーションの理解を主たる目的とした授業であった。

各実践例の授業設計、評価基準、課題等の報告から、今後の実践に向けて2つの大きなヒントを得た。第一に「共生日本語・英語」という考え方である。ネイティブのような流暢な言語の習得を目指すのではなく、互いの意思を通じ合わせるために有効な語彙や言い回しを模索することの重要性が強調された。第二に、協働学習のテーマ設定の方法である。単なる交流ではなく、共通のタスクを協力して行うことにより、互いの理解は深まっていく。フォーラムでは、「互いの背景や知識を生かせるテーマ」「共通して関心のあるテーマ」「双方にとって身近なテーマ」という3つのポイントが紹介された。

交流の場を設けるだけでなく、その場でどのような学びを創出できるかは、教員による授業設計によるところが大きい。日米双方の学生にとって有意義な学習機会を提供できるよう、フォーラムで得たヒントを手がかりに、今後の授業に取り組んでいきたい。

FD関連企画のご案内

学習支援・教育開発センターでは、ホームページやメールリストを通じて、学内外で開催されるFD関連企画を紹介しています。メールリストでの情報配信をご希望の場合は、学習支援・教育開発センター事務室までお知らせください(本学専任教職員を対象とします)。

今後、学外で開催される主な企画は以下の通りです。その他の企画についても随時お知らせしますので、積極的なご参加をお待ちしています。

研究会・研修会のご案内ページ <http://clf.doshisha.ac.jp/research/research.html>

開催日程	企画名称	会場
11月2日(土)	Q-conference2013	九州大学伊都キャンパス
11月16日(土)	日本私立大学連盟 私立大学フォーラム	京都産業大学壬生校地
11月30日(土)・12月1日(日)	大学教育学会 課題研究集会	同志社大学今出川校地
2月22日(土)・23日(日)	大学コンソーシアム京都 第19回FDフォーラム	龍谷大学
3月1日(土)・2日(日)	大学評価学会 第11回全国大会	山梨大学
3月18日(火)・19日(水)	第20回大学教育研究フォーラム	京都大学

※上記一覧は予定ですので、開催時期や会場が変更されることがあります。

※参加にかかる費用は学習支援・教育開発センターが負担します。

BOOKS

新着図書情報

学習支援・教育開発センターでは、大学改革やFD関係の図書資料を収集し、専任教職員の方に事務室で閲覧していただけるようにしています。貸出も可能ですので、センターに直接お越しになるか、ホームページ掲載の所蔵図書資料一覧をご覧ください。ご希望の資料があればメールまたはお電話でご連絡ください。学内便でお届けします。



大学教育の再構築 学生を成長させる大学へ

金子元久(著)
玉川大学出版部
2013.5
ISBN:978-4-472-40464-1



未来の大学教員を育てる 京大文学部・ブレFDの挑戦

田口真奈・出口康夫
京都大学高等教育研究開発推進センター(編著)
勁草書房
2013.3
ISBN:978-4-326-25088-2



学生主体型授業の冒険2 予測困難な時代に挑む大学教育

小田 隆治・杉原 真晃(編著)
ナカニシヤ出版
2012.11
ISBN:978-4-7795-0699-4



学習の支援と教育評価 理論と実践の協同

佐藤浩一(編著)
北大路書房
2013.4
ISBN:978-4-7628-2801-0



高等教育における つながり・協働する 学習環境デザイン 大学生の能動的な学びを支援する ソーシャルメディアの活用

久保田賢一(編著)
晃洋書房
2013.5
ISBN:978-4-7710-2452-6

* センターで所蔵した方が良いと思われる書籍等がありましたらご推薦ください。

また、図書以外にも、FDに関する雑誌・機関紙や報告書等を収集しています。下記の「図書資料のご案内ページ」よりご覧ください。

図書資料のご案内ページ <http://clf.doshisha.ac.jp/books/list.html>

——2013年度『大学入学準備講座』のご案内——

学習支援・教育開発センターでは、高校生向けに、大学で要求される学習の質と量を知ってもらい、正しい学部選択の機会を与えることを目的として、「大学入学準備講座」を開講しています。

この講座では、秋学期の土曜日の午後に、各学部・学科の教員が、それぞれの専門分野で扱う学問の内容から面白そうなテーマを選んで、実際の大学での講義と同じ形式で、高校生に授業を行います。

今後開講分の講座については受講申込みを受付けていますので、詳細は以下のURLよりご参照ください。

大学入学準備講座のページ http://clf.doshisha.ac.jp/preparation_course/course.html

	13:10~14:40	14:55~16:25
10月5日(土) 今出川校地	【講座①】福島原発「事件」の真実を隠すマスメディア 社会学部メディア学科 浅野 健一 教授	【講座②】ウェイトコントロールの理論と実際 ～パフォーマンス向上とメタボリックシンドローム・ロコモティブシンドローム予防～ スポーツ健康科学部 石井 好二郎 教授
10月12日(土) 京田辺校地	【講座③】中国の多様性を知ろう:国内の多民族、国外の中国人 グローバル・コミュニケーション学部 日野 みどり 教授	【講座④】内燃機関の作動原理とこれからの持続可能な低炭素社会の形成 理工学部機械システム工学科 松村 恵理子 准教授
10月19日(土) 京田辺校地		【講座⑤】やきもの(陶磁器)の文化史 -文化と科学の視点から- 文化情報学部 鋤柄 俊夫 教授
10月26日(土) 今出川校地	【講座⑥】家族心理学入門 -システムとしての家族という考え方- 心理学部 興津 真理子 准教授	【講座⑦】女性が活躍する社会をめざして 政策学部 川口 章 教授
11月2日(土) 今出川校地	【講座⑧】伝統をグローバル化する中国 グローバル地域文化学部 副島 一郎 教授	【講座⑨】あなたはホモエコノミカスですか? 経済学部 新関 三希代 教授
11月9日(土) 京田辺校地		【講座⑩】医用画像を用いたバイオメカニクス 生命医科学部医工学科 井上 望 教授
11月16日(土) 今出川校地	【講座⑪】聖書の楽しみ方、味わい方 神学部 石川 立 教授	【講座⑫】ことばにすり込まれた「前提」を発見しよう -弱者を教う「英文学研究」- 文学部英文学科 金谷 益道 教授
12月7日(土) 今出川校地	【講座⑬】現代中国への見方 法学部政治学科 浅野 亮 教授	【講座⑭】韓国の若年層の格差と競争 商学部 遠藤 敏幸 准教授

column 大学教育の今

予測困難な時代に立ち向かい、時代を生き抜くには

学習支援・教育開発センター所長 山田 礼子

2012年の中央教育審議会の答申では、予測困難な時代に立ち向かい、時代を生き抜く力を学生が確実に身に付けるための大学教育改革が、学生の人生と日本の未来を確固たるものにするための根幹であり、そのために、学士課程教育の質的転換をすすめることが不可欠であるとの認識が提示されました。同時に、学生の主体的な学びを確立させるための始点が、十分な学修時間の確保であり、そのために、学士課程教育課程の改善の責任が大学にあることを明確にしたのも新しい点でした。

それでは、「主体的な学び」とは一体どのようなことを意味しているのでしょうか。私は、「学生が目的意識を持って、受け身ではなく、学びに主体的に関わり、何らかの学習成果につなげること」と定義づけてみたいと考えます。学びに主体的に関わるという態度は、大教室で行われる教員の講義主体の授業を通じて、学生が目的意識を持って学ぶ場合には、醸成することもできるでしょうし、かつ成果につなげることも可能でしょう。

しかし、近年では、多くの大学の授業において、従来の教員の側から提供する講義主体のティーチングに加えて、学生が能動的に関わるアクティブ・ラーニングが導入されるなど、教育方法に関する研究の蓄積がなされ、その蓄積から、学生の主体的な学びを促進する方法として、アクティブ・ラーニングが注目されるようになってきました。

「何を教えるか」から「何ができるようにするか」という、教育活動の中心目標の移行が促進され、その場合に双方向型のアクティブ・ラーニングが効果的であるという認識が共有されつつあることがこの注目の背景といえるでしょう。実社会で直面する複雑・多様な正解が一つではない課題に適切に対応できる思考力、創造力および課題探求能力を育成するため、教員は、授業においては、ディスカッションや学生のプレゼンテーションによる双方向対話型の授業を展開し、学生自らが資料や文献を探し、授業の事前・事後の学習に取り組むことを推奨するようになってきました。様々な調査および研究結果は、アクティブ・ラーニング手法は、学生の主体的な学びにつながる教育方法であり学士力関連の学習成果の獲得に一定の効果をもたらしていることを示しています。

今後は、学士課程教育の質的転換の鍵として、学生の主体的な学びとアクティブ・ラーニング手法の関係を丁寧にモニタリングすることが不可欠であると考えています。